

真言宗における儀軌訓読語の変容

—金剛界儀軌の場合を中心に—

松本光隆

はじめに

漢文訓読語の通時的变化については、小林芳規博士をはじめ、門前正彦氏などに依つて説明されてきたところであるが、本稿は、平安中期と院政期の金剛界儀軌という儀軌の加點資料を取り上げ、また、同じ宗派に属する儀軌の訓読資料に限定して、その異同を整理し、訓読語が、如何に、言葉として変化・変遷して院政鎌倉期の訓読語を生成したものであるのかという問題の一端を考えてみたいと思う。

一、考察対象資料の検討

本稿の考察対象とした資料は、以下に掲げた四資料で、主として資料番号1・2の資料を中心とする。

一、真言宗広沢流関係資料

1、東寺観智院藏金剛界儀軌平安中期点（第五群点）

（奥書）（朱書）「太平興国九年（九八四）八月十八日受法了」（尾題右下）

太平興国七年嵩嶽會善寺瑠璃戒壇
院礼闍梨大師處傳受僧守堯記
同九年二月一日此本傳受同四日校了（卷末補紙ニアリ）

（以上本奥書）

（別筆）「右一卷者禪林寺之請來此本亦甚

古本也蠹魚損之令弟子僧等遂修

補焉後葉軸等莫忘

元文四（一七三九）未己年八月五日勸修寺院家浄土院東寺

定額僧第三臈權僧正賢賀五十六載

2、石山寺藏金剛界儀軌天永三年点（円堂点）

（奥書）天永三年（一一二二）三月五日「於瀧尾寺書」寫了執

筆僧實道本也

〔同年四月十一日於蓮葉院此之御本奉受了實道〕（朱書）「點了」

（別筆）「保安四年（一一二三）六月十七日於富小「路壇所上乘院」

御房」奉受了」

二、真言宗小野流関係資料

3、石山寺藏金剛界儀軌平安中期点（順曉和尚点）、奥書ナシ

4、東寺観智院藏金剛界儀軌上天永二年点（東大寺点）

（奥書）「朱書」天永二年（一一一一）四月廿日移點畢」

天永二年辛卯四月十七日奉書畢

（別筆二）「同年十月十一日奉讀畢」

（別筆二）「延享第二（一七四五）丙寅仲夏望日加修補了

僧正實賀俗壽六十三

資料番号1の東寺観智院藏平安中期点は、右に掲げた奥書が存するもので、宗叡の将来した本文とされる。本文には黄橙・淡朱・白・朱の四種の加点が存するもので、いずれも平安中期の加点とされる資料であるが、その内、白点と朱点とは、全巻に亘って詳密な第五群点の加点が存しており、これを考察の対象とする。本資料は、つとに、築島裕博士によつて論じられたもので、ヨコト点の形態から、仁和寺関係の資料であると推定されている。また、本書には、白書の書入に「天台本云普賢法眞言」などとして、天台宗の本文に言及したものがあり、この書入からも眞言宗関係の資料であることが裏付けられる。

資料番号3に掲げた石山寺藏の平安中期点は、平安中期の三種の訓点加点が加された資料であつて、淡橙と茶色の第一群点と淡朱の順曉和尚点との加点が存する。この内の順曉和尚点の訓読を対象とするが、順曉和尚点は、平安中期、石山寺の淳祐の流の所用のヨコト点の形式であることから、眞言宗小野流に連なる資料として位置づけることが出来よう。

二、眞言宗広沢流における訓読語の異同

二種の平安中期の資料と院政期天永年間二資料との訓読法の比較を数量化したものが、以下の表である。

眞言宗における平安中期加點資料と院政期（天永年間）加點資料との訓読法の異同

		語序・文の断続	音読訓読	字訓	助字	読添語
広沢流関係	125	52	30	61	350	
小野流関係	107	62	39	34	313	

仁和寺関係の資料1・2の資料、及び、小野流関係の資料3・4の資料のそれぞれの訓読法を比較し、その異同箇所数を掲げたものであるが、資料4の東寺観智院藏天永二年点は、二巻本の金剛界儀軌の上巻に当たるもので、言語量としては、仁和寺関係の二資料間の比較に比べ、言語量としては約半分しかないものである。右表では、数量的にはほぼ等しい異同箇所数が存するが、相対的に、小野流関係の異同の比率は、広沢流仁和寺関係の二資料の間の異同の約二倍となり、小野流二資料間の訓読の開きが大きいと言ふことになる。

以下には、右に集計した訓読法の異同の内、仁和寺関係の二資料間の訓読法の異同で、類型的な異同を取り上げて考察を行うこととする。

イ、語序の異同（用例は訓読文の形で示した。用例中、平安中期点の「」

は白点、天永三年点の「」は墨点を示す。以下同じ。）

〔倒置文〕

①「應」觀(す)へし。獨一股一杵なりト。當(に)觀(す)へし。

自一身の相變して降三世と成(り)又。(平安中期点)

獨股杵を觀(す)應(し)。當(に)自身相は變して降三世と成る

と觀(す)「當」(再讀)(し)。(天永三年点)

②諦に觀せよ。諸法の性は皆「於」自一心に由(り)り。(平安中期点)

諦に諸法の性を觀(せ)よ。皆「於」自心に由る。(天永三年点)

③即(ち)説く。亦是月に非(ず)。(平安中期点)

即(ち)亦非月を説く。(天永三年点)

④上(ス)に於て想へ。金龜を。(平安中期点)

「於」上に金龜を想へ。(天永三年点)

⑤上(ス)に想へ。寶樓閣「を」。(平安中期点)

上に寶樓閣を想へ。「」。(天永三年点)

⑥想へ。大壇の門を開くと。(平安中期点)

大壇の門を開くと想へ。(天永三年点)

⑦想ハク「」の佛の前に而「も」皆己一身有(り)て以(て)

親「」近し侍「」奉(し)たてまつる。(平安中期点)

一々の佛前に(し)て「而」皆己身有(り)て以(て)親近侍奉(し)

たてまつる。(天永三年点)

右の比較例は、語序の異同例に關してのもので、表中に「語序・文の断続」として集計した一二五例の内の一部であるが、平安中期点に短文の傾向があるほか、倒置に訓読されるか否かに類型的異同が存する。何れも平安中期点において倒置に訓読される箇所を、天永三年点

に於いては返読されて、倒置文とならない異同が類型的に存している。これとは逆に、天永三年点に倒置の箇所を平安中期点で倒置としない例は見出せない。

口、音読・訓読の異同

①空の中の諸如来彈指して「而」驚覺して告(けて)言(たま)はハ

ク(平安中期点)

空の中の諸の如来彈指し「而」驚覺して告(け)て言(は)く

②時(に)彼(の)諸如来便(ち)行者に勅(して)言(は)く(平安三年点)

時に彼の諸の如来行者に勅(して)言(は)く(天永三年点)

③次(に)諸有情に於(て)當に大悲心を興(す)へし(平安中期点)

次に諸の有情に於(て)當に大悲心を興(す)「當」(再讀)し。(天永三年点)

④諸天魔を降伏し(平安中期点)

諸の天魔を降伏して(天永三年点)

⑤則(ち)諸輪壇を成(す)。(平安中期点)

則(ち)諸の輪壇を成す。(天永三年点)

⑥諸聖尊(39) 諸如来(45 86 102) 諸戲一弄(109) 諸菩薩(114)

諸不善(119) 諸善法(119) 諸怖畏(120) 諸相(121)

諸の聖尊(28) 諸の如来(31 50 58) 諸の戲弄(62) 諸の菩薩(64)

諸の聖尊(28) 諸の如来(31 50 58) 諸の戲弄(62) 諸の菩薩(64)

諸の不善(65) 諸の善法(65) 諸の怖畏(66) 諸の相好(66)

(天永三年点)

右は、音読訓読の異同として整理したものの一部で、原文漢文に「諸」字が二字の漢語に連なる場合の訓読法の異同で、平安中期点では「諸如來」の如く音読されたものと解釈されるが、天永三年点においては、いずれの例も「諸の如來」の如く訓読されており、この例外も見出せない。

以下に掲げるのは、助字の訓読法の異同に関するもので、既に、漢文訓読史上の問題として取り上げられているものを含んだものである。

八、助字の訓読の異同

〔當〕

①當に大悲心を興(す)へし(平安中期点)

當に大悲心を興す〔當〕(再讀)し。(天永三年点)

②當に灌頂一地を得へし。(平安中期点)

當に灌頂地を得〔當〕(再讀)し。(天永三年点)

③當(に)羯磨の四波羅蜜の契を結(ふ)へし。(平安中期点)

當に羯磨の四波羅蜜の契を結ふ〔當〕(再讀)し。(天永三年点)

④當(に)金剛三昧耶を結(ひ)て而して金剛百字の明を誦(す)へし。

(平安中期点)

當に金剛三昧耶を結(ひ)て〔而〕金剛百字の明を誦(す)〔當〕(再

讀)し。(天永三年点)

⑤彼彼に於(て)當に解(す)へし。此(の)眞言心に由(り)てなり。

彼彼於より・當に解して此の眞言心に由(る)〔當〕(再讀)し。

(天永三年点)

〔参考例〕聖尊(を)奉送し已(り)ナハ當に加持の契を結(ふ)〔當〕。

(平安中期点)

聖尊を奉送(し)・已(り)て當に加持の契を結(ふ)〔當〕

(再讀)し。(天永三年点)

「當」字については、平安中期点において不読にされるか、または、「べし」訓が与えられ再読とはされないが、天永三年点においては再読とされる例である。ただし、参考例として掲げた平安中期の白点の例は、「當」字の再読を示した例と認められ例外とならう。

〔應〕

①次(に)〔應〕勝心を發(す)へし(平安中期点)

次に勝一心を發す應し。(天永三年点)

②忍願〔應〕三タヒ拍(つ)へし。諸有情(の)罪を摧(く)。

(平安中期点)

忍願三(た)ひ拍(ち)て諸の有情の罪を摧く應し。(天永三年点)

③〔應〕等一持の印を結(ふ)へし。(平安中期点)

等一持の印を結ぶ應し。(天永三年点)

④次(に)〔於〕灌頂(の)後〔應〕如來の鬘(音)繫(く)

へし。(平安中期点)

次(に)〔於〕灌頂の後に如來の鬘を繫(く)應し。(天永三年点)

⑤復「應」是(の)念(音)を作(す)へし。(平安中期中点)

復是(の)念を作(す)應し。(天永三年点)

〔参考例〕前の印一相を改(め)不(して)此(の)眞言を誦(す)應し。(平安中期中点)

前の印相を改(め)不(して)此(の)眞言を誦す應し。(天永三年点)

○二羽金剛拳にして檀慧相(ひ)鉤(す)應し。進力は豎

(て)て側(め)合(せ)よ。(平安中期中点)

二羽金剛拳にして檀慧を應(に)相ひ鉤して進力を豎(て)て側(め)合(せ)よ。(天永三年点)

「應」字は、平安中期中点・天永三年点ともに再読の確例は存しないが、傾向的には、平安中期中点では、不読と解釈される例と例外的に参考例に示した助動詞「べし」訓を与えた例が認められる。天永三年点では専ら助動詞訓「べし」を与えて訓読し、その例外と認められるのは、参考例の後掲例の一例のみである。

〔於〕

①摩を〔於〕兩の目にせよ。(平安中期中点)

摩を兩目に於け。(天永三年点)

②不動佛は〔於〕心に。寶生尊は〔於〕額に。無量壽は〔於〕喉に。不空成就は頂にせよ。(平安中期中点)

不動佛心に於け・寶生尊額に於け・無量壽は喉に於け・不空成就は

頂に(せ)よ。(天永三年点)

③〔於〕頂に金剛掌せよ。(平安中期中点)

金剛掌を頂に於(て)せよ。(天永三年点)

④旋舞して〔於〕頂に掌(音)せよ。(平安中期中点)

旋舞して掌を頂に於(て)せよ。(天永三年点)

⑤旋舞して〔於〕頂に掌せよ。(平安中期中点)

旋舞して掌を頂に於け。(天永三年点)

「於」字の訓読では、平安中期中点では、不読にされるか、または、「して」あるいは「おいて」の辞の訓が与えられて訓読されているのに対して、天永三年点では、不読にされるか、または、「して」あるいは「おいて」と訓読される他に、用例に掲げた如く、「おいてす」または「おく」の詞の訓が与えられている。

〔等〕

①煩惱隨煩惱蘊界諸處等は皆幼與焰との如し。(平安中期中点)

煩惱隨煩惱蘊界諸處等は皆幼與焰との如し。(天永三年点)

「等」の訓読に関しては一例のみであるが、平安中期中点に「ことし」訓を与えた確例が存する。

〔與〕

①次(に)十六尊と八供と〔與〕四攝との三昧耶の「印一契」を

結へ。(平安中期中点)

次(に)十六尊(と)八供と四攝與の三昧耶の印契を結へ。

(天永三年点)

②大と「與」次とを改(め)不して六を舒(へ)て(平安中期点)

大と次與を改(め)不し(て)六を舒(へ)て(天永三年点)

③我れ今即(ち)此(の)身「與」諸菩薩と等(く)して

(平安中期点)

我今即(ち)此の身は諸の菩薩與・等し(天永三年点)

「與」字は、平安中期点に於いては不説とされるものであるが、天永三年点においては、助詞「と」を直説される。

助字の訓説では、一般に、漢文訓説語史上解明されてきた変化と対応するものも存するが、その異同も含め以上のような類型的異同が存する。

二、読添語の異同

「格助詞の表示」

①檀慧禪智「豎(て)よ。」忍願「交(へ)て掌(音)に入(れ)よ。」

(平安中期点)

檀慧禪智を豎(て)て忍願を交(へ)て掌に入(れ)よ。

(天永三年点)

《檀慧禪智豎忍願交入掌》

②檀慧禪智「豎(て)よ。」(平安中期点)

檀慧禪智を豎(て)よ。(天永三年点)

③額の前(の)にして二羽「分(カケ)ちて(平安中期点)

額の前(の)に二羽を分(ち)て(天永三年点)

④二羽金剛拳にして檀慧「相(ひ)鉤(す)應(こ)し。進力(進)は豎(て)

て側(こ)めて合せよ。(平安中期点)

二羽金剛拳にして檀慧を應(に)相ひ鉤して進力を豎(て)て側(め)

合(せ)よ。(天永三年点)

⑤二羽金剛縛して忍願「應(に)豎(て)合(す)へし。」

(平安中期点)

二羽金剛縛して忍願を豎て合(す)應し。(天永三年点)

⑥指の聲「法界に遍(く)す。(平安中期点)

指の聲を法界に遍(く)せよ。(天永三年点)

⑦索は進力「環(音)の如(く)にせよ。(平安中期点)

索は進力を環の如(く)にせよ。(天永三年点)

⑧二の拳「交(へ)て胸を抱(か)け。(平安中期点)

二拳を交(へ)て胸を抱(か)けよ。(天永三年点)

⑨二拳「射(イ)ル法の如(く)にせよ。(平安中期点)

二拳をもて射る法の如(く)にせよ。(天永三年点)

⑩二拳「以(て)鬘を繫(け)て(平安中期点)

二拳をもて以て鬘を繫(くる)か)コトク(せ)よ。(天永三年点)

⑪進力「其(の)背を「を」柱(音)にせよ。(平安中期点)

進力をもて其の背を柱(せ)よ。(天永三年点)

⑫右の「の」羽「杵を「を」擲(イ)せよ。(平安中期点)

右の羽に杵を抽(ひ)擲(せ)よ。(天永三年点)

「参考例」進力檀慧を牙(に)にせよ。(平安中期点)

進力檀慧「牙(の)ことく(せ)よ。(天永三年点)

二資料間における読添語の異同は、多様であるが、そのなかで、右

に掲げた如く平安中期点において格助詞を表示されない箇所に、天永三年点では格助詞を表示した例が纏まって存する。たとえば①の例の如きで、平安中期点において加點がない。格助詞「を」等を補読すべき箇所との解釈もあるうが、用例として示した如く、この種の類例が多く存する。二資料の比較における例外は、参考例として示した例のみで、この例は平安中期点が格助詞「を」を読み添えているのに対して、天永三年点でその箇所に「を」が加點されていない例である。①から⑧までは、格助詞「を」の例、⑨より⑪は「をもて」の例、⑫には、僅かに存する格助詞「に」の例を掲げた。これらの助詞類の読み添えの異同は、たとえば、訓読される場合のヲ格相当の語が、①に《》を付して掲げた如く、原漢文において動詞に先立つ構文を有する場合で、こうした原漢文の訓読においての異同が類型的に存する。

「得」の構文の訓読」

①蓮花部の轉輪(の)「之」主宰と成(る)こと得(平安中期点)

蓮花部の轉輪(の)「之」主宰と成(る)こと得(天永三年点)

②一切衆生に悉(く)に皆開(く)こと得(平安中期点)

一切衆生に悉(く)皆開(く)こと得(天永三年点)

③此(の)心眞言を以(て)縛を解(して)歡喜(すること)得(平安中期点)

此(の)心眞言を以(て)縛を解(して)歡喜(すること)得(天永三年点)

此(の)心眞言を以(て)縛を解(して)歡喜(すること)得(天永三年点)

此(の)心眞言を以(て)縛を解(して)歡喜(すること)得(天永三年点)

「参考例」菩提心を證(すること)得(平安中期点)

菩提心を證(すること)得(天永三年点)

続いて掲げた例は、「得」字の存する構文の訓読で、二資料間の異同は、平安中期点が「こと得」と訓じているのに対して、天永三年点では「ことを得」と訓ずる傾向を見いだせるようである。但し、例外も一例存して、参考例として示した如きものも存する。

「如」字の構文の訓読」

①進(の)初を屈(め)ムこと鉤(音)の如(く)にせ(よ)(平安中期点)

進(の)初を屈(め)ムこと鉤(音)の如(く)にせ(よ)(天永三年点)

②禪智堅(つる)こと針の如(く)にせ(よ)(平安中期点)

禪智堅(つる)こと針の如(く)にせ(よ)(天永三年点)

③移屈(する)こと蓮葉の如(く)にせ(よ)(平安中期点)

移屈(する)こと蓮葉の如(く)にせ(よ)(天永三年点)

④次(に)金剛縛を以(て)進力屈(する)こと鉤(音)の如(く)にせ(よ)(平安中期点)

次(に)金剛縛を以(て)進力屈(する)こと鉤(音)の如(く)にせ(よ)(天永三年点)

⑤進力屈(する)こと蓮(音)の如(く)にせ(よ)(平安中期点)

進力屈(する)こと蓮(音)の如(く)にせ(よ)(天永三年点)

⑥心(に)上(に)旋(る)轉(する)こと日輪の相の如(く)にせ(よ)(平安中期点)

心(に)上(に)旋(る)轉(する)こと日輪の相の如(く)にせ(よ)(天永三年点)

⑦端座(し)て儀則の如(く)にせ(よ)(平安中期点)

端座(し)て儀則の如(く)にせ(よ)(天永三年点)

⑧端座(し)て儀則の如(く)にせ(よ)(平安中期点)

端座(し)て儀則の如(く)にせ(よ)(天永三年点)

端座(し)て儀則の如(く)にせ(よ)(平安中期点)

【参考例】進力は屈して鉤の如くにして（平安中期点）

進力を屈せむこと鉤の如くして（天永三年点）

続いて右に掲げたのは「如」字の存する構文の訓読の比較例を示したものであるが、平安中期点において「こと…如し」と訓ぜられるのに対して天永三年点では、接続助詞「て」を読み添えて「て…如し」と訓ぜられた異同が纏まって存する。但し、例外が存しており、参考例に掲げた如くである。

以上、仁和寺関係の二資料の訓読を比較したが、その訓読の異同には、右に述べた様な類型的異同が存する。これらの類型的異同は、原漢文の構文や用字とに関わった広沢流仁和寺における金剛界儀軌の訓読語の変化と認められるものであらうと考えられる。

資料番号1の平安中期点には、以上に取り上げた朱点と白点のほかに、黄橙の訓点がある。この訓点は、陀羅尼部分に加点が密で、漢文本文には部分的に存するのみである。用例としては多くはないが、朱点・白点に対して、異なつた訓読を示したものがあつた。この黄橙の訓読を天永三年点の訓読と比較すると、一致を見るものが存する。具

① 月の上に如來の威（音）をせよ。（平安中期点）
月上如來の威あり。（天永三年点）

② 索は進力を環の如く（せ）よ。（天永三年点）
索は進力 環の如く（せ）よ。（平安中期点）

③ 縛に由（り）て禪智 堅（て）て進力 屈すること蓮（音）の如く（く）にせよ。（平安中期点）
縛に由（り）て禪智 堅（て）て進力 屈すること蓮の如く（く）にせよ。（平安中期点）

縛に由（り）て 禪智を堅（て）て進力を屈して蓮の如く（く）せよ。

（天永三年点）

④ 四は堅（て）て五は堅（て）て交へよ。（平安中期点）
四を堅（て）て五を堅（て）て交へよ。（天永三年点）

⑤ 禪智 開（き）て偃セ 附（け）よ。（平安中期点）
禪智を開（き）て偃「ケ」附けよ。（天永三年点）

⑥ 旋舞して「於」頂に掌せよ。「檀、旋舞シテ掌ヲ頂ニ於ケ」
旋舞して掌を頂に於け。（天永三年点）

⑦ 縛に由（り）て禪智針（音）にせよ。「檀、針（の）コトク（セ）ヨ」
縛に由（り）て 禪智針の「コトク」にせよ。（平安中期点）

⑧ 六「一」度は 又（へ）て「而」覆（セ）セテ「檀、覆（セ）ヨ」
六度を又へ（て）「而」覆（せ）よ。（天永三年点）

これらは、先に論じた類型的異同に関わるもので、天永三年点の訓読法が平安中期点黄橙点に認められるものである。また、①⑦の読添語の異同や、⑧の文の断続に関する異同例も、天永三年点の訓読は、平安中期点黄橙点の訓読に等しい。天永三年点に現れた訓読の遠源の一部を、こうした平安中期の仁和寺関係の複数の訓読の一つに求めることが出来るかも知れない。

三、真言宗小野流における訓読語の異同

以下の比較例は、小野流における石山寺藏平安中期の訓読と東寺観智院藏天永二年の訓読とを比較したものである。

イ、語序の異同

〔倒置文〕

①即(ち)〔於〕空中に觀マク 諸佛胡麻(の)如(く)し(て)虚空界に遍滿(したま)へりト(平安中期点)

即(ち)〔於〕空の中に諸佛は胡麻も如くし(て)虚空界に遍滿シタマへりと觀せよ(天永二年点)

②想ハク 身に十地を證シヌ〔於〕如(實)一(際)に住(し)ぬと(平安中期点)

身に十地を證して〔於〕如實の際に住セリと想へ(天永二年点)

③復想ハク 佛の足を礼(し)て白(して)言(く)(平安中期点) 復佛足を礼(す)ト想へ(天永二年点)

倒置に関しては、平安中期点において倒置に訓読された同文的箇所を、天永二年点では倒置としていない。この異同の状況は、先の仁和寺関係の両資料の異同に通ずるものである。

ロ、音読・訓読の異同

①諸有情(平安中期点)

諸の有情(天永二年点)

②空中の諸如來(平安中期点)

空の中の諸の如來(天永二年点)

③唯(し)願(く)は諸如來我に所行處を示(し)ナラルとおもふ(平安中期点)

唯し願(く)は諸の如來我レに所行の處を示シメシタマヘトと(天永二年点)

④諸世尊に白サク(平安中期点)

諸の世尊に白く(天永二年点)

〔参考例〕諸の天魔を降伏シ(平安中期点)

諸の天魔を降伏し(天永二年点)

音読訓読の異同も、仁和寺関係資料の比較と同様の様相をしめしている。

ハ、助字の訓読の異同

〔當〕

①當に自身の相觀(すへ)シ。(平安中期点)

當に自身の相觀(す)〔當〕(再讀)し(天永二年点)

②次(に)諸有情に於(て)當(に)大悲心を興セ(平安中期点)

次(に)諸の有情に於て當に大悲心を興す〔當〕(再讀)し(天永二年点)

③當に灌頂地を得(平安中期点)

當に灌頂の地を得〔當〕(再讀)し(天永二年点)

〔應〕

①此の眞言誦(す)應(し)(平安中期点)

應に此の眞言を誦す「應」(再讀)し(天永二年点)

②結跏趺坐(す)應(し)支節動揺(せず)不(れ)(平安中期点)

應に結跏趺坐して支節動揺(せず)不(れ)「應」(再讀)し(天永二年点)

③忍願(も)て「應」三(た)ヒ拍(ち)て諸有情の罪を摧(く)へ

シ(平安中期点)

忍と願とをもて三(た)ヒ拍(ち)ツ應(し)諸の有情の罪を摧(く)て

(天永二年点)

④行者次に降三世大印結(ふ)應(し)(平安中期点)

行者次に降三世の大印を結(ふ)應(し)(天永二年点)

〔於〕

不動佛を〔於〕心に(し)て寶生尊を〔於〕額に(せ)ヨ 无量壽

〔於〕喉にシテ不空成就を頂に(せ)ヨ (平安中期点)

不動佛を心に於(いて)せよ 寶生尊を額に於(いて)せよ 无量

壽をは喉に於(いて)せよ 不空成就を頂(に)ヨイテせよ

(天永二年点)

〔與〕

皆幻と〔與〕焰との如ク(平安中期点)

皆幻と〔與〕焰と(の)如し(天永二年点)

〔從〕

①先(つ)〔從〕檀慧より開ケ(平安中期点)

先ツ檀慧(返) 從(り)開ケ(天永二年点)

②先(つ)〔從〕檀慧より散ス(平安中期点)

先(つ)檀慧(返) 從(り)散(せ)よ(天永二年点)

助字の訓読では、「當」「應」字の訓読について、天永二年点に再読が認められる。「於」字についても、天永二年点に詞訓「おいてす」を与えた例が見えており、仁和寺関係の両資料の異同に通ずる異同の様相が認められる。このほか、「從」字の訓読に差が存している。

二、読添語の異同

〔格助詞の表示〕

①禪慧檀智 | 反(して) 相ヒ又(へよ) (平安中期点)

禪と慧と檀と智とを反(して)ケテ相(へ)又(し)て(天永二年点)

②四無碍辨十自在六通諸禪 | 悉く圓滿せむ。(平安中期点)

四無碍辨と十自在と六通とを悉く圓滿せむ(天永二年点)

③二手 | 金剛拳(し)て各(の)腰の側に安ケ(平安中期点)

二手を金剛拳にして各の腰の側に安(て)ケ(平安中期点)

④福智二羽合セヨ | 十度初分 | 交ヘヨ(平安中期点)

福と智の二の羽を合(し)て十度の初分を交(へ)よ(天永二年点)

⑤即(ち) 彼(の) 金剛掌 | 十度結して拳に爲セ(平安中期点)

即(ち) 彼の金剛掌を十度を結(し)て拳に爲(す)セ(天永二年点)

⑥禪智 | 屈(し)て掌に入レヨ(平安中期点)

禪と智とを屈(して)して掌に入(れ)て(天永二年点)

⑦忍願 | 豎(て)て針の如(く)せよ(平安中期点)

忍と願とを豎(て)て針の如(く)す(天永二年点)

⑧八度「内に相ヒ又(へ)ヨ 忍願」前(の)如(く) 堅(て)ヨ
(平安中期点)

八度を内に相(ひ)・又(へ)て忍と願とを前の如く堅てて

(天永二年点)

⑨福智「具するに由(か) 故に。(平安中期点)

福と智とを具するに由か故(に)。(天永二年点)

「如」字の構文の訓読」

①忍願堅(て)て針の如(く)せよ(平安中期点)

忍と願とを堅てて針の如くす(天永二年点)

②忍願申(へ)て針の如(く)せヨ(平安中期点)

忍と願とを申へて針の如くして(天永二年点)

③進力屈(し)て鉤の如(く)せよ(平安中期点)

進と力とを屈して鉤の如くして(天永二年点)

読添語では、仁和寺関係の二資料の比較と同様に、平安中期点に格助詞「を」の表示されない箇所、天永二年点では読み添えられた例が存する。

以上、先の仁和寺関係二資料の比較と同様の類型的な差異が、小野流の二資料にも存すると認められるのであるが、たとえば、助字の内「應」字については、仁和寺関係の天永三年点では再読されてはいないし、「與」の訓読や、読添語の内「如」字の存する構文の訓読も掲げた如く平安中期点と天永二年点での差異はない。

おわりに

以上、検討を加えた四資料において、平安中期から、院政期にかけての訓読語の変容は、真言宗小野流、広沢流という宗派を越えて、共通した類型的変化を見せる部分も存するものの、それぞれの宗派内の変容の事情を異にする事象が存したものと認められるが、宗派間の変容の異同の実態や、儀軌以外の書の訓読語の問題は、今後の課題としたい。

注

- 1 小林芳規「漢文訓読史上の一問題―再読字の成立について―」(『国語学』第十六集、昭和二十九年三月)
- 2 同「及字の訓読」(『国文学言語と文芸』第四号、昭和三十四年四月)
- 3 同「助詞イの残存―平安時代の使用者と用法―」(『東洋大学紀要』第十三集、昭和三十四年五月)
- 4 同「漢文訓読史から見た打消の訓法」(『文学論叢』第十九号、昭和三十六年三月)
- 5 同「唐代説話の翻訳―『金剛般若経集験記』の訓読について―」(『日本の説話』七言葉と表現、昭和四十九年十一月)
- 6 門前正彦「漢文訓読史上の一問題―『ヒト』より『モノ』へ―」(『訓点語と訓点資料』第十一輯、昭和三十四年三月)
- 7 築島裕「円堂点の成立と展開」(『国語学』第三十号、昭和五十四年八月)

(まつもと みつたか、広島大学助教授)